

土屋正義編輯

繪本石山軍記

第二編

七

遠野

2269

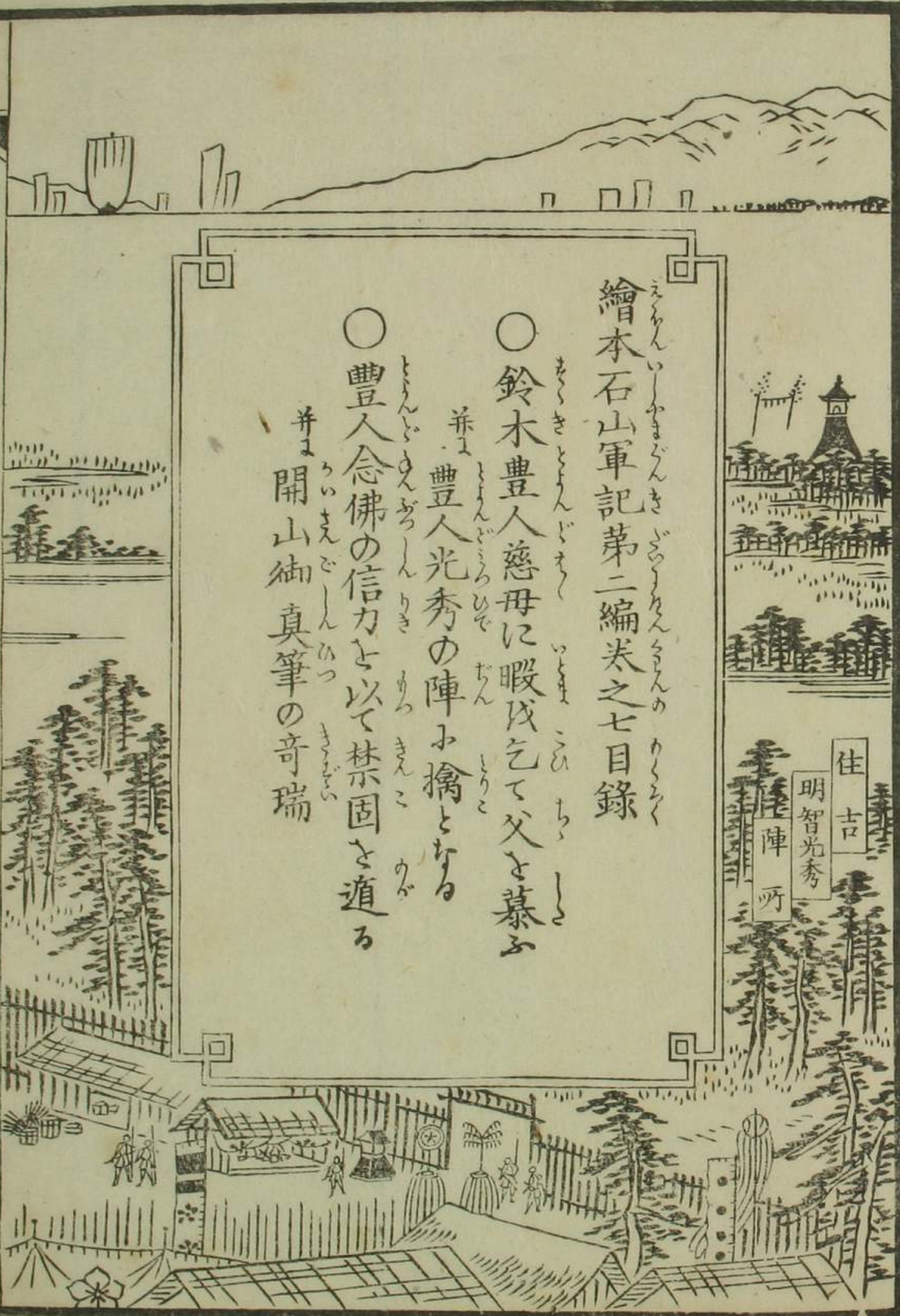
17





阿遠 14  
2269  
17

石山軍記二篇卷之七目錄



繪本石山軍記第二編末之七目錄

○鈴木豊人慈母に暇乞て父と慕ふ

并よ豊人光秀の陣ちん小擒とらとる

○豊人念佛の信力と以て禁固と遁る

并よ開山御真筆の奇瑞



住吉

明智光秀

陣所





○小林團藏勇戦石山勢と討散以  
 并一 鈴木豊人初陣高名

繪本石山軍記第二編卷之七

土屋正義 編輯

○鈴木豊人慈母に暇を乞て父と慕ふ并豊人光秀の陣に擒と成  
 然程に織田右大將信長卿に石山本願寺と數年の攻戦鈴木重幸  
 が謀策に陥され一度も勝利の軍を得ず始終に兵士を損さる而已  
 就中今般大軍を以て石山城を取圍をせらるに門主櫓上出でて歎  
 詎と述讀経音楽と奏念佛と唱へ専ら寄手の勇氣を蕩し敢  
 て矢玉も飛さざるや心力已れと撓まざる條無念至極と思ひけらに  
 陣内出勢の空虚と計て根来より之の糧米と云計較火薬と仕込  
 俵物つき入夜陰に到り歸陣と考へ數多の牛馬に之を負し陣所

石山軍記二篇卷之七





諸共火を放つ緯古今未曾有の神策多れば士卒の死傷數を知む信  
長初め諸の軍將も亦動亂に僉恐縮して頓に攻寄工夫も付て依之  
信長卿にも剛氣猛勇の大將多れども斯る大敗傳未外聞悪く這儘  
扯把人も大人氣を如何と思ひ置る處へ筒井順慶入道前の如く  
歸城と勸めて言上せし信長卿にも思慮巡らされ還軍有べきに定  
り給ふ先當國手當堅固あんとて惟任日向守光秀として住吉の附  
城に籠らしめ次に佐久間右衛門尉父子は天王寺の焼跡に砦を築  
かせ石山四方の城々に近藤山城守松永彈正父子水野監物池田孫  
次郎荒木攝津守山岡孫太郎青地千世壽等と始めとして多勢  
の軍兵本願寺と遠卷一諸國より此通路を閉ぎ殊更本願寺に

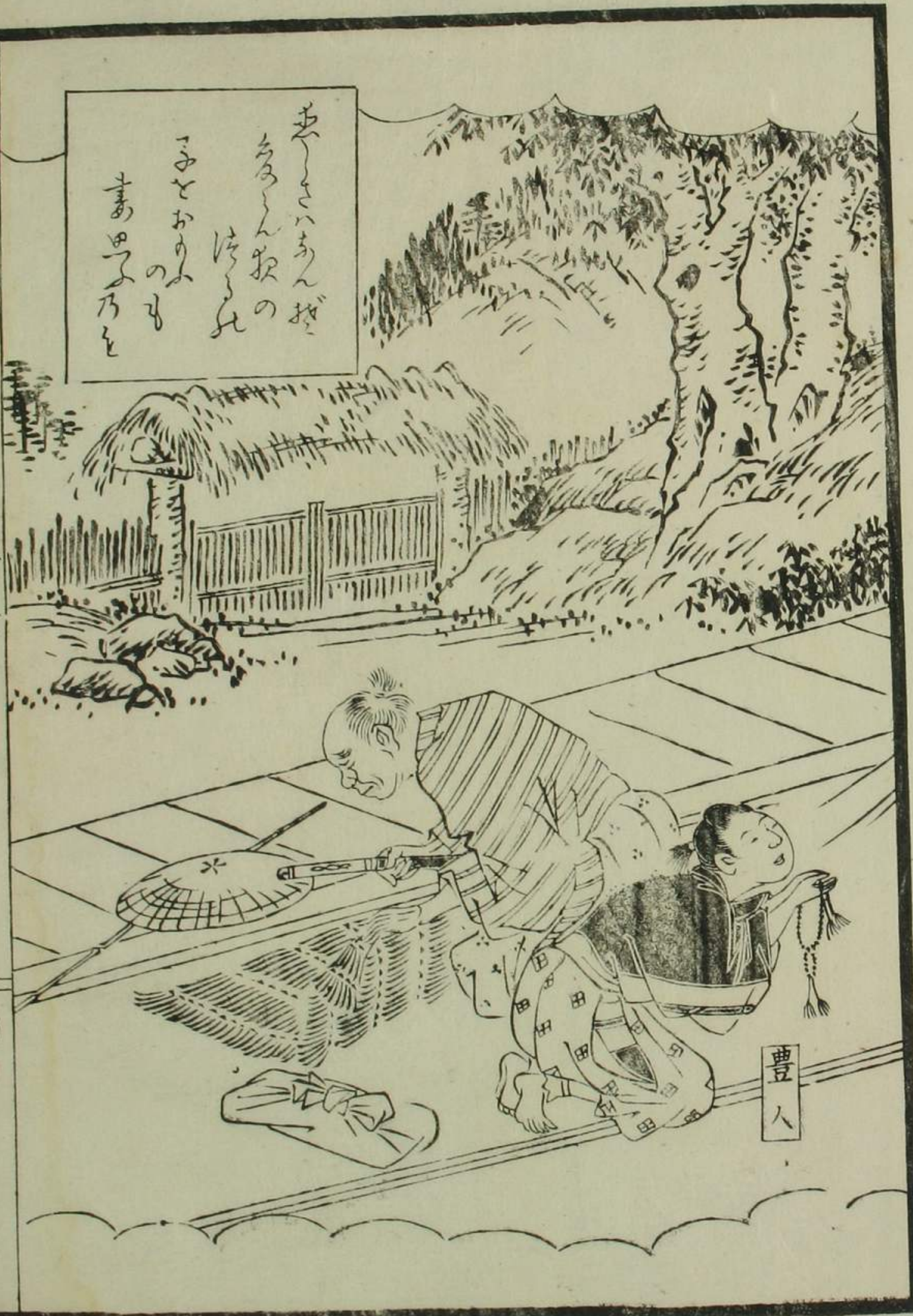
於てい毛利家と因に深きくは西國海上の往返を第一の要路と  
て河合口大小の軍艦數艘を浮り鳥銃を備へ鎗薙刀を飾り諸手  
の番船僉合圖を定め事有れば集り防ぐ準備をも亦住吉の濱手  
於ても足掛りの砦を構へさせ沼野伊賀守吉茂間鍋主馬兵衛春  
儀之を守り次に尼ヶ崎西の宮に池田中川が軍兵們多勢にて是  
を堅め今十分諸方の手配り指揮を傳へて定め給ひつ天正四年  
六月七日河内國若江城を進發有て濃州岐阜に歸城し給ふ  
秋八月の頃より江州藩生郡安土山に城廓を築き當年秋月中旬に至り全  
て移轉し給ふ依之濃州岐阜城を嫡男信忠卿へ譲り給へり  
と着るより備へ無ては協ふべきと石山の四方の地方を撰て五十一ヶ所  
の砦を構へ八木駿河守神田土佐守田邊平治山田新助山名内記草



山内膳益田將監山田三大夫高松十郎治郎和歌藤左工門等を始め  
とて數萬の逞兵を分ち守らせ痿む氣色に無りたり茲に石山籠城  
に就て御門主に頼まれ奉り佛恩報謝と專一として味方の勇士有が  
中にも紀州雜賀の衆人にも殊に鈴木の一黨ふ於て武功美名天下に轟き  
さし織田家の勇士と謂柴田滝川松永筒井惟任長岡惟住と始め曆  
々の諸將も敗軍せしむる緯就中重幸が謀術智略の致を処之最も數回  
勝利を得るも雖も重幸一向富貴高名と望まざり唯宗門の退轉せん  
緯を憂ひ信長の剛惡を懲るの外亦是併し高祖親鸞聖人中  
興開山蓮如上人の高德末世長遠の今に及び宗門永く繁榮すべ  
き法脉瑞應尊ぶと心有信者感涙を催しる者亦鈴木黨の中に

於ても彼鈴木孫市郎良固の武藝兵術に長ずる而已あらず信念義  
操鐵石の如く去る元龜元年故郷雜賀を出て本願寺へ御方にまい  
りより曾て故郷へ音信も為さず唯上人の御為に勤勞し佛恩報謝  
小一命と抛さんと素より一心を決し居れば頃日軍師重幸が秘策成  
受本國雜賀ふ赴と雖も敢て我家へ立寄もせず直ちに攝州へ扯返し  
にたり時に孫市が家に妻子あり亦名を豊人と呼せり當年十四歳に  
ある男子の俱に孫市が義心と傳へ門戸と閉て人に見えぬ貧しき星  
霜を送りたるが此頃當地へ龜井六郎諸共鈴木孫市も歸國をせしが  
唯農民牛馬と催促して再び攝津國へ歸りたるは妻子の灰に聽把け  
ねば日來の戀し猶弥増しつ躬を知るもの涙ありたり豊人の稍有て泪





豊人故郷  
 雑賀より  
 石山城ふ  
 趣く園





と押へ慈母に對ひて稟を様ハ吾儕八歳の時父上家と出石山に籠  
城し給ひより朝夕に憧れ慕ひ参らせて既に七年の年月を過し  
今速俺躬十四歳に及び候へ乍麼武士の家に生れ来て現在父と  
戰場に働りせ斯く我躬安閑として家に残り那面目有て人見へ  
んや哀れ唯今より御暇と給り度石山へ参りて父上諸共御佛の  
爲に一功を立て生死と父に任せ奉らんと思ひ込で告聽へり慈  
母ハ潜然と打歎ぎつ是ハ健氣ある緯直ま的り糸遠鈴木孫市が  
子程有て雄々々望み慈母も嬉しく父御處へ話さば満足に思す  
らん然るが良人孫市どのに前に石山へ入城の節呉々も自に宣ひ  
たる様は夫武士の戰場に臨りたる家と思つて妻子と忘れ生て

歸る鳥と頼まれ汝ハ構へて豊人と養育し良固の遺品として永  
く眺りよ自然佛智不思議の加護により織田の法敵打亡し宗門  
相續の時お到つて俺命冥加に叶ひ存命せば其時愛度再會すべし  
假令數十年の光陰を累ぬ共相互に音信を傳ふと嚴に仰せ有し  
と守り竟に一度の便りもせず然るを父上乃仰せに背き猥に石山の  
城にお到り我ら良固の子と云とも父子の對面に置き置て母諸共  
に勤氣とや蒙らん且頃日人の風声と聞に織田の諸軍四方に分配  
し數十箇所の附城を構へ許多の番兵を籠て昼夜往来と吟味  
るも尚も汝敵方の擒とあり口惜き死と遂まば父上の勇氣も折  
け母の歎きも亦奈何らん石山に赴き父上と俱に武功を立ん時



節は早く未だ幼弱の腕もくまらぬ心を鎮めて止まれよと涙をぐら  
に諭しければ豊人累て乞稟しつゝの慈母御愛顧忝る侍る父の  
仰せの吾儕乳臭の孩兒今已に十四歳の少年と成婦女と等し家  
窓に蟄り父の生死と余処に着人緯如何やと一言甲斐なく口惜き  
緯言人方ち源右大将頼朝卿の御年十三歳に成給ふ頃平治の  
擾亂差起りて終に源氏の負軍となり御父義朝朝臣と諸俱都を  
落させ給ひつゝ御父義朝に道と後れを遣後刃に引下り給ふと野  
武士の徒數十人逸るも是と落人と着て把武器剥んと取巻たりし  
頼朝卿些しも驚き給ひつゝ太刀抜放して真向に差挿し近寄野武士  
兩三人斬倒し残る奴們八方へ追捲り父君の後と慕ひ給ひつゝ成長の

後東國に義兵の旗を揚木曾の強敵と打平け平家の二門を討けし  
源氏一統の世とあり給ひつゝ幼稚より父上の御物語更に一句も忘れ  
候ふ吾儕源君に劣り侍るも鈴木孫市良固の子となり忠孝の為  
命と捨るに破る藁沓と棄るより安く倘母上御免許なきに於て  
の操全く切服仕るゝとて逸脇差へ掌と懸れば慈母へ縋り着つゝ  
押し止り嬉しき緯と申しつゝ先より慈母の停めりし稚心に那緯と  
う言やらんと心を引着ん計りあるぞ余程に思ひ詰める上十重の固  
め百重の関も臆せば無難に距まんり卒旅立の準備を仕やと故  
意界しき單衣を着せ刀と藁苞に押隠し了事農民の風体は打  
扮文書細々と認め持せ道條守りの為にと親鸞聖人の御真筆が



る九字名號の掛物一幅袋に納めて肌に着させ心強くも出立ちとせ  
 せたる實や武士の妻も子も義勇の決心潔くして天晴世々の鏡之  
 とて聽人後に稱賛せしとぞ然程に豊人の故郷を立出行程二日にし  
 て攝津國より住吉の宮居近く差うれば茲に惟任日向守光秀此言と  
 構て往來人と改む翼をて通り難く守護の番兵豊人を咎り何  
 國より何處へ致る者ぞ審に申し上よと罵つり豊人恐れる形勢  
 の曰く我の紀州熊野浦の土民に候ふ父母共お世を早ふり渡世の營  
 にも心お任せど故郷と信傳出て候ふ自是先々一飯一宿の人の恵み  
 と頼に候へ且父母の菩提も吊ひ旁々國々の靈場をも脚に任し  
 順拜志きして居候之則ち天王寺と禮拜仕らんと當處を通り候

へども素より土地不案内の者哀ま右靈刹への道條と教へ給ひ  
 有難くと土に頭と摺付稟しけむ番兵の中に小賢ぎ男最  
 前より豊人が起行狀お詞附に心を止めらるる進み寄て咎めらる様  
 へ尔方面親と失ひ順禮を兼國と出るに寺送りら庄官印鑑の  
 往來券書茲へ出して着すと云豊人たつと心に驚きらるる利發  
 の少年些も動せど貧家の孩子にて暮し候へ擅那寺への勤め  
 も怠り亦庄官との貢の取替何やら角やら債お憚り寺送りも往  
 來券書も氣着るが稟し受候と誠やくに陳しければ件の番  
 兵嘲笑て曰己の儲々膽太き小童り先刻より汝が詞を考へ察は  
 南隅熊野浦の者に非む將相貌も眼中突どく眉間廣く艶ある処



管む士族の何の某之卑き容に他目と欺く謀つて吟味を遁れん  
 方便石山城中へ緯の有て忍の使ふ相違あざる者門渠奴が懐中改り  
 よと指揮に雜卒們破乱々々と立懸り豊人と捕へ懐中を搜しけり  
 肌を着る小囊ありて改り着れば豈測人や南無不可思議光如來の  
 九字の名號と一通の文書の有る然るも推量に違ひ本願寺  
 の同族小極つる荷物の中と吟味せし引解きつ改り着る葉菴  
 に短刀と秘へ入り弥這者穿議ある罪人と頓て旗頭惟任日向守光  
 秀斯くと討へ申せしる光秀則ち豊人と白洲へ引出し処持しる  
 文書と披き着るに七年前以前石山籠城の後絶て音信なき赴きを  
 荒々首りに書記しつ該子豊人今年も十四歳徒ふ家に在る浅口

惜之自殺生害にも逮ぐんとき故ふ良人の遺命を犯し石山城中へ遣  
 使者之哀も戰場へ召連られ生死の際とも御覽下されしと書  
 早り鈴木孫市どの宛名せり光秀讀で大きに感心し皆ら城中の  
 勇士鈴木孫市が子豊人と云る者ふる敵を知らも幼年上りの  
 躬に遼々と軍陣の中に臨み父と生死と俱にせんとの健氣なる行狀  
 稀者之助けて城中へ送るべき者なれど軍中の風俗敵の類族を味方  
 へ測り捕へ得れば後日謀計の種ともなれば能勤りて陣中に置べし  
 と云雜卒們畏り豊人と引立一室の裡に閉籠をきて且夜番卒と  
 屬て護らせらる獄舎に等しき形勢なり斯ても豊人の覺悟を極  
 め俺此儘茲に殺さるるも戰場に向ひ陣死あす共死の道に緯變る



づりず然ば暫く命を全やし憂苦を嘗て存命ありと云父も再  
會せん鳥も無きや唯如来の御力頼む外平一と一心不乱に小  
を以て御念佛稟ま外他事なく泪一滴落さず観念せしハ實は孫  
市郎が一子として陣中殊に稱賛せしと云

○豊人念佛の信力を以て禁固と遁る并びに開山御真筆の奇瑞

儲も鈴木孫市郎が一子豊人の哀れや惟任が若にて囚人となり假の獄舎  
に禁めしむるが余夜三更も打過て營中も寂莫と音絶つ遠寺の  
鐘の音訪ふ折しも豊人の更に寝も遣せ唯父母の緯而已思ひ續け  
口唱念佛に心傾け居る居室の燈灯の影に忽然として怪し人の影立顯  
われにたり誰あるやんと透し看ねば身の長六尺有餘の大法師墨の衣

の袖紋り上て向脛高く裳をうげ番兵の前を暴く歩きて豊人が傍に  
來て立ちまゝる多くの番兵睡眠にあはぬど這法師をば答むる者  
く些し目も遮らぬ容子之此僧豊人に對ひて曰く汝孝烈厚く父を  
慕ひ忽ち敵中の擒とせざる緯不便の至り看るに忍びずよつと  
俺獄中の憂苦を恤む父の許へ助け出さんと欲ふ努々疑念生ずと  
云と云聽より豊人大きに歡び唯夢の心地と云余故由を知む先三  
寶禮して稟しける今聖大慈大悲を垂れて該陣中を脱遁し  
給ふ再生の恩何日の世に忘るべき彼異僧打点頭つ背を擬ひ  
豊人を軽々と背負上つ番兵の前を融々と歩行過るに一人見之者  
留る者多く安々と營外に立出て高き牆を刎距土塀と飛石山城



さして蒐行し不思議と謂も愚ありたり侍て石山本願寺に當時  
 信長本國へ歸城も雖も附城と多く構へる軍兵許多籠置るに  
 石山も亦尚防禦手厚く屬兵々々の番兵護り固め非常と禁  
 り間牒と詮議し片時も油断無りし程に這時本堂の後に當つて  
 暴に合圖の大鼓の音聞へる城中の番兵耳と聳て驚破敵方よ  
 り癖者ふどの竊入りと覺へる疾名捕と呼り我先に堂の背  
 へ走來つて如何なる者ぞと是と省る少年齡十三四歳美少年夜廻りの  
 番卒に省答りん是非の間答最中より番卒彼少年と罵つて曰  
 く汝前より紀州雜賀の住人なる鈴木孫市殿の子と雖も斯用慎  
 嚴重の城中へ夜中竊び入ると不敵之思を手導の癖者有べり

秘し立せば苛き拷問足腰立ぬ蝦責受る人音も偽り稟しあせしと  
 威しつ憚しつ尋ね問へ少年片臆に笑と含と何条父の在せる城  
 へ來つて虚言と吐て那ら爲べき俺曾て竊入る者に非を一昨日  
 本國紀の路を啓行し泉州蟻通にて一宿し疇昔當國住吉まで  
 來る處測らば惟任が若の關所に押留せられて怪めらる處持の品共  
 吟味あひて鈴木孫市が躬と氣地しゆ囚人し一室に籠らる  
 遁き出べき便ふき処に奇異や今夜深更に速び一箇の大法師出  
 來りて曰く汝父に遭見へん心操と失ひ敵中の虜と成緯不便故  
 に今俺背に負て助け出すし努々疑ふ緯莫ね示されつ即座條  
 と背に負給り築地の高塚刎距飛趾蒐る勢風雲の如く瞬く間



多ふく茲に伴侶來て偕亦俺(稟)されたるに汝住吉の若く吟味を  
 受介儘敵(取)上置る慈母の玉章守りの名號父の譲りの短刀三  
 等汝が爲に取返し(た)る尚這城中あて怪(受)る父の前(出)して  
 諸人の疑念を解候へとて三等の行物を賜りたるゆ(介)有難き詞  
 に盡(ぐ)く抑聖(何)國の御方(我)等に奈何ある因縁有てよの  
 厄難を救(せ)給ふと問(大)法師別に答(一)首の和歌を詠聽  
 せ給ふ其歌に曰く○月影の到らぬ里(れ)れども眺(む)る人の心(心)  
 ど清(と)と稟(遺)されつ(忽)然とて容体(間)路に失(れ)るは是  
 必ずしも天狗(の)処(為)にや俺身(今)大難(の)逼(至)と道(も)父(に)再會(せ)  
 一(め)人情(議)論(の)最早(無)益(に)侍(る)孫市(の)此(旨)と達(せ)れ

て子(に)候(ふ)豊(人)と稟(者)初(て)忝(着)と告(給)ひてよ證據(父)の前  
 小(出)すべ(と)云(つ)堂(の)椽(側)に腰(懸)恐(る)氣(色)ありけ(れ)番  
 卒(們)も今(更)ふ便(多)く相(議)して組(頭)訖(組)頭(より)孫市(は)知  
 せ(る)凡(生)有(者)に子(を)思(い)ぬ(る)况(て)光(陰)七(箇)年(と)相(隔)音(信)も  
 せ(ず)棄(置)る(る)表(の)武(士)の意(氣)張(立)れ(恩)愛(の)繼(士)も平(民)も情  
 實(異)る(る)や如何(況)や戰(國)の蒼(を)凌(ぎ)親(を)慕(多)尋(ね)來  
 る(子)を鐵(腸)金(心)の勇(士)と云(も)争(介)憧(愛)を(知)る(る)ん(や)殊(に)奇(異)  
 の入(城)の轉(未)旁(々)以(て)心(得)ぐ(け)れ(バ)鈴(木)孫(市)郎(良)固(ハ)速(早)走  
 來(つ)て先(面)貌(着)る(に)八(歳)の時(子)別(れ)れ(れ)も肉(身)の親(子)ハ着  
 紛(ぶ)くも非(ど)夢(つ)と許(り)驚(く)れ(つ)やと傍(近)く立(守)て吾(を)



父の孫市ぞうり聴が如きの入城傳未の親子が爲に奇異の助  
けも衆人の惑評御前の思召父子の證據と披露せざれば汝を  
城内の置難くんと云べ豊人父と三挿して寂々孫市の面と打瞻の借  
へ父上を在る年来戀慕ひ居候ふと嬉し涙に地ふ平伏て暫し  
は言葉も出ざりしが漸有て彼三品を把出し父の掌に渡して稟  
しるの吾儕先刻白狀告る如き既に住吉にて敵兵に囚われ此三品  
をも把上られを最口惜く存せし處右の異僧の慈愛に依て忽  
ち我手に把戻し緯難中の間の躬の幸甚一々御覽下さるべしと  
云へ孫市夫々更り着て中にも開山御真筆の九字名號の幅と謂  
るる鈴木家累代秘藏の什寶更に疑ふ所無りなれば父子の證據

は是先第一次に守り刀として遺せし短刀亦荆妻の漆狀とも仔細  
あり這上六家老下間頼廉殿まで届けし上の沙汰を侍人と豊人  
にも余心を得させたる是は孫市那謂斯く憚るとるれば久く相  
離せしる父子の間ゆへ惟任の方に内謀と逞ふし忍術と得たる  
者を使ひて豊人と救ふと見せさせを竊み城中に屈居とき余罪無と  
も豊人まで敵と引入る疑ひ懸らば忠義一圖の孫市あねば上北  
評議の是非に依てハ城中隅々隈々まで人更りし豊人の身も無  
しものど一城中追出すべきの処存之然るに御門主顯如上人にも不  
思議と豊人入城の次第逸くも御聽に達しければ近習と以て孫  
市云せ給様豊人とやら入城の轉未ハ右左猥説と立惑ふべくぞ





住吉の陣  
 所み豊人  
 不思議  
 危難と  
 逃了圖





偏へん少年せうねんの孝烈こうれつを愍あはむまじき佛音ぶつおん薩さつの御感ごかん擁おほに疑うたがひな  
 早はや々父子ふし共御前ごぜん上あらるべし尚委あまの細直ほそな々聞人きこひとの命いのち孫市まごいち有あり  
 たりとて豊人とよびと引伴ひきばん侶れ近習きんじゆふ属しよて参殿さんでんしければ廣書院くわうしよえんの上  
 檀中央だんちゆうに御門主ごもんぬし頭如上人かみごとうじゆ御父子ごふし禪ぜんと設たてけて座ざし給たまふ左ひだりの  
 軍師ぐんし鈴木重幸すずきしげゆき右みぎの下間しもま頼廉たのりけん余外そのあま様さまの侍士しやくし席せきと正ただして  
 列坐りやくざふせり鈴木孫市すずきまごいちの躬みづか豊人とよびと伴侶ばんれ御前ごぜん遙とほに膝行ひざぎやう平伏ひらふしき時  
 に上人じゆんじんの仰おほせ出いさき々様紀州さむら雜賀ざがに遺のこし置おく一子いつし豊人とよびと孝心かうしん厚  
 く遼々りやうりやう當山たうざんに來きれる由哀よしあれむべし殊ことに奇異きぎの法師ほふし囚獄しゆごに臨のぞみ豊  
 人を救すくひ出いして導まちて去さる全ぜんく佛陀ぶつたの妙智めうち力りきあり人ひと別わかて開祖かいそ聖  
 人の御真筆ごんまひつ九字くじの名號なごうと処持しよぢるまじし一入いつに拜まが聞き懇望こんぼうに欲ほむと

命いのちせに孫市まごいち謹まごころんで拜承まがし一件いけんの掛物かぶものと捧たげ奉まねば上人じゆんじん恭まごころしく  
 上うへ檀だんの壁かべに掛かき置おけられ稍暫しやうしんく禮拜らいはい有ありて曰いく實じつは是こゝ御真筆ごんまひつお相  
 違ちがひ々々しんしん高聲かうせいに稱名しゆなし給たまひらば一座いつざの面々めんめん紗しや隨喜じゆいき渴仰かつおうして  
 異口いこう同音どうおんふ念佛ねんぶつしるる有難ありがたき上人じゆんじん兩眼りやうがんに御淚ごなみを浮うめし  
 未世みせい五濁ごじやくの期きに速すみごと雖いも佛ぶつの誓願せいげん空くうしく高祖かうそ聖人せいじん未  
 だ西土さいどに歸去ききよし給たまふ智惠ちゑの光明くわうめうを放はなち給たまひ茲こゝに現然げんぜんとして  
 在あるまじや令しん豊人とよびが敵てきの擒とらとかりしを容ゆるみ顯あげ助けし法師ほふしの天  
 狗くわう妖魔あまの所為しよゐは非あむを辱はらむ開山かいざん聖人せいじん假かりに化現けげん在あり父子ふしの忠  
 孝かうと恤あはれ者もの之その其證跡しせいせきと為なるべき物もの何方なにがたも眼めを留とどめて能よ看みら  
 れし御名號ごなごうの下したに泥土どろち多く付つき次に詠吟えいぎん一首いっしゆと云遺いひのこされし



本師法然上人の秀歌に於て一心唱名撓まざる信者の自胸の中  
月影清度り往生治定と獲得し弥陀の愛慈蒙る緋光明遍照十方  
世界念佛衆生攝取不捨と餘さず漏さず救ひ給ふ唯瞻むる人の心に  
有緋之如來の感納示し給ふものごと詳に教導加へ給へ孫市父子  
云も勿論之此座に有る上下の衆人聖人の御奇瑞と肝銘し  
將鈴木父子が至信の程も感得る依之勇士們大きに銳氣を生  
ト斯る御奇瑞蒙る上ハ佛敵にびて幾千年も宗門永く榮  
華の美を疑ひ有べきやとて隨喜の涙止り踊り上つて歡び  
り然バ衆士報恩の躋と堅めさす豊人舉用せずんば有る  
らずと上人より御土器と下し賜り忠臣御門下の列に加え給ふ

孫市父子が歡び譬るに物ハ織田信長一回猛威を震ひ天下  
半と掌握まると雖も忽ち朝露の葉上に浮む如く逆臣の爲織  
田の霸業と斷滅し榮耀四十九年に於て夢の覺む頭如上人一旦南  
紀に流落あり信長の女姦謀に苦し給へ共嵐の村雲吹拂ふ如く  
測む他より余法敵と打平宗門數百年の今に繁昌し聖孫の  
榮福諸宗門の冠より仰ぐべく猶尊信とぞ  
○小林團藏勇戦石山勢と討散を兼び鈴木豊人初陣高名を  
干時織田方の隊伍の中河分口の砦と堅めたる平手監物安藤平  
左衛門住吉の一將沼野伊賀守間鍋主馬兵衛等四個の軍將  
謀し合して其勢三千五百人船手陸手に下知を傳へ本願寺より



して構へ置る木津の砦へ押寄つて鳥銃と飛し火矢を躬懸無二  
無三に攻詰にたり木津の砦に脩籠りたる下間少進仲之より五  
百余人の士卒と着令し前後の持口と堅く護固り矢玉と飛し  
て防ぎたりしが寄手の三千五百の大兵をねば討とも射ねども事と  
もせず手負と乗距死人と踏距喚き叫んで攻詰ければ今ハ談若殆  
忍へ難く早騎と以て石山お注進し後詰の援兵請にたれば鈴木重幸  
指揮して曰く木津の味方第一の要害にして倘是と敵に攻陥する時  
ハ西國の通路一圓に絶果べし鈴木孫市志摩與四郎兩個二千余人  
の選兵と牽ひて敵の後より斬散すべしと云兩個畏つて軍兵と  
卒し城門と開き砂煙と奉て木津の砦の後詰お駈ゆく借下間

少進仲之ハ不意ハ大軍に攻立られ命限りと防戦盡せども寄手  
ハ多勢入替々々息も継せざ攻立られて既に危なく看へる処ハ石山の  
援兵鈴木志摩の兩將大兵と以て押來るより介候の者より告知  
せられ寄手の軍將沼野間鍋ハ一千五百の兵と分ち後詰に對  
ふて陣と張ねば平手安藤の兩將ハ残兵と指揮し砦と攻る繚弥  
急るり石山の援兵鈴木志摩ハ暫時も猶豫氣色もあく間鍋沼  
野が陣中ハ一文字に列つて討て懸り喚き叫んで斬込程に織田方ハ  
軍兵們ハ今朝よりの戦ひお勞れても新手の敵兵に駈崩され陣  
脚亂して隊立も既に敗軍の色と顯りける茲に筒井順慶が新参  
の侍臣に小林團藏定景と云者あり素ハ野武士の魁首にして身



の長六尺有余の大兵力量飽きで強く面貌色黒く眼圓く鎌髭  
厚く生出で頬骨尖り出恰も悪鬼羅刹と着る如し人恐れ  
と云緯ふけねば常に山野と巢穴となりて人を害し財寶を掠  
奪し暴悪無道の癖者ありしと乱世の時の人望として介強  
勢勇猛と称美し筒井家に招われ扶持せられ數度の軍に高名  
とふ倍々已が強勇に慢とて人を輕んと禮讓と失ひ傍若無人に  
行狀々々筒井の家臣の言に速を以て他門他家の者までも憎  
まぬ者いふり々々今日小林團藏定景の主人順慶の使者  
て彼任吉の砦に籠りしを惟任日向守光秀が許に到り其序木津  
村に赴きつゝ合戦の形勢見物せし処石山の援兵們勢ひ強く沼

野間鍋の兩勢突立られ負色着て亂れ定景例の慢心忽  
ち萌して已れ石山勢何程の緯やあらん唯一崩しに討素ま  
勢ふ乗とて砦を攻落さば俺一個の功と一着をべとて召連る手  
の者三十余人と前後左右に相隨て肌は鎖帷子の着込に固り大難  
刀と小脇に搔込勝色着る石山勢の横合より衝と駈入つて主  
従一齊の關と作て馬武者歩卒の嫌ひふく當る任せに斬倒して四方  
八面電光の如く馳巡つて薙立らばさしも勇し石山援兵も小  
林主従に妨げられ散乱顛動して近着得ず志摩與四郎此形勢  
と着て大きに怒り那者ふれば軍中に飛入不敵の腕立奇怪千方  
命知ぬのらぶ虫奴其處を退と敦圉猛く鎗引しとさつて突て



懸ねば定景奚ぞ敵と選らん波瀾の如く薙刀打振双方又先打合  
 一つ秘術と盡して戦ふりしが與四郎苛つて繰出と鎗鋒定景  
 透して傍に開き鐵壁も碎けよと薙刀と與四郎危や薙刀に乗  
 んと如何しけん片足踏外一馬の右手へ墮と落ねば定景得こ  
 りと斬んと為ると志摩が郎等十七八個馳來つて主人を助け小  
 林を支へて戦ひたれば志摩の難る引退きなり石山方にて勇名  
 高る鈴木に並ぶ與四郎にも小林と勝負果さぞ引にたれば從  
 兵門へ僉震ひ戦き敢て小林に双向ふ者なく右往左往に逃出一  
 つり團藏定景勝に乗て俺片腕にも足ぬ石山勢片端く武殺  
 に為吳人死際頼む門徒の奴原定景が薙刀の三部経剃刀受さ

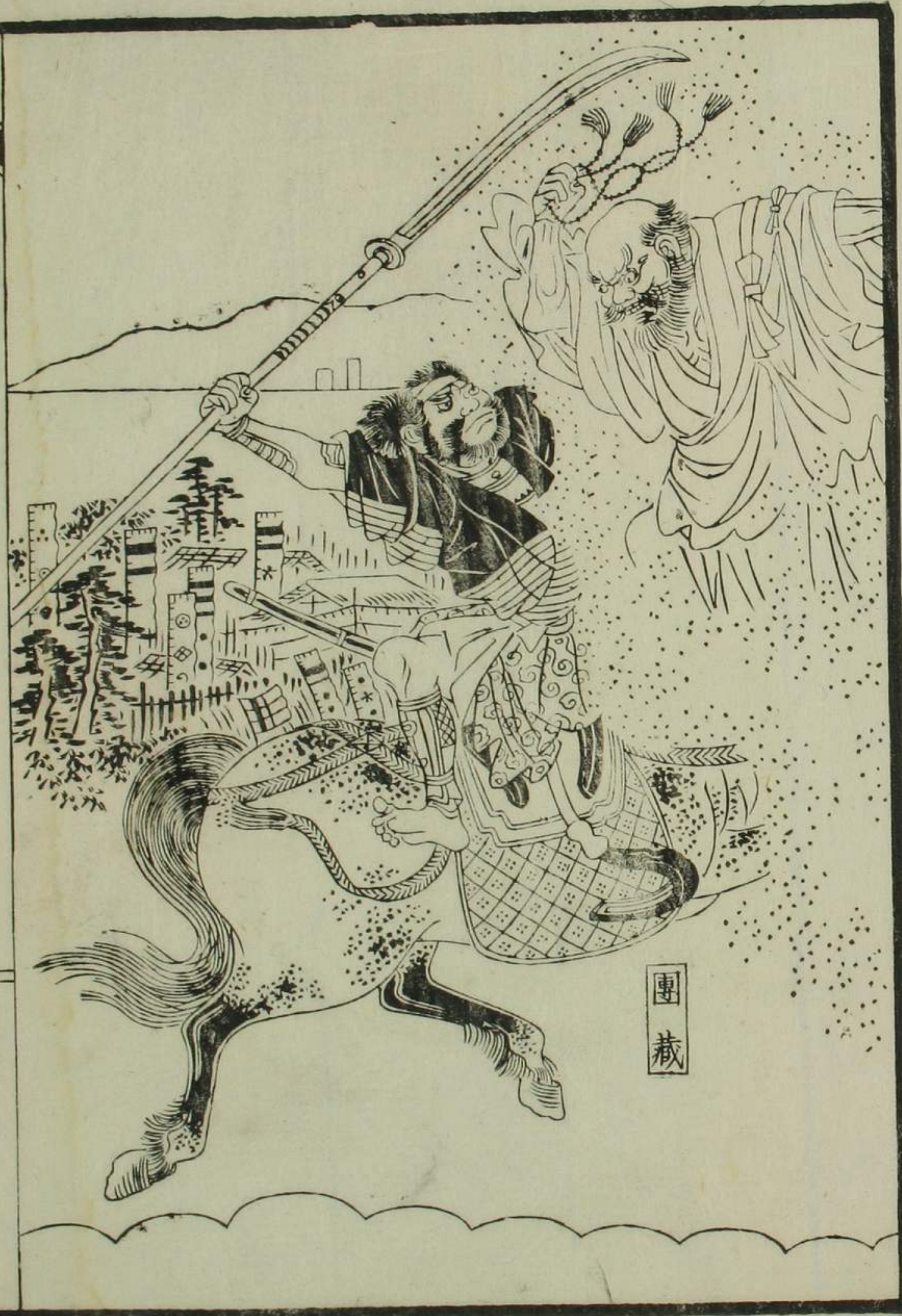
せ往生させん抹香くすて念佛稟せと飽て廣言吐散つて逃る  
 と追て駈回り一實牛頭馬頭の如く思われり這時鈴木孫市郎  
 良固の小高き堤に馬と立て味方の噪立を取鎮りたる織田の総  
 軍勇氣と増味方敗軍に逮むんとする形勢之全く定景の処為と  
 着りたる誰にもあれ彼癖者討やとて頻に味方へ指揮せられども  
 軍將志摩与四郎廣賢さても渠が及下に討るぐりり猛者俺討  
 止んと云者なき愈飽倦切る形勢之這時鈴木が隊伍の中より洗  
 革具足に黄金作りの太刀を佩き連錢栗毛の馬に跨り聲高らる小  
 名乗りの俺こそ紀伊國雜賀の住人鈴木孫市郎良固の一子鈴木  
 豊人少年十四歳軍の今日が初陣なり年足の初ども武士の芽生敵



に把て不足の有まじ首取て高名に備へ給へと大刀拔とけり斬  
 て懸とび小林團藏瞻めて大ひお笑ひ机上素讀の文學と違侍  
 一度劔刀の振方過失へ身首段々と成戰場ふ來り小兒戲游の竹  
 馬乘と同様思て後悔目前疾々逃よと言捨つ鈴木が本陣へ駈行  
 となくぬが豊人馬と廻りて行向を塞ぎ夫等差別の教を待  
 んや卒一擧の勝負決し給へと大刀拔電して斬て蒐ねば定景大  
 の眼を潤と着聞き美少年と思ひ着遁し遣へ勝負と望むと最悪  
 けれ去々今世の暇と取せんとも薙刀打振唯一薙と討に思ふに異あ  
 子腕の手練前後左右を乗廻し此に顯れ彼も隠れ陽炎電光と  
 晃く大刀影目には着ふが相敵の定景胡蝶の狂へる猫の如く六尺有

餘の大兵と纏ふ十四歳多豊人の術に標つられつ戦ひる軍中  
 珍事の見物として兩陣等しく鳴と鎮り眼と止て見物ある實は是大驚  
 小雀と合せ戦ひしに異あず介危ふ繚云様もあらず定景原來勇  
 兵多れども勿々に此小童侮り難と精神を勵ましはと喚き豊人が塊  
 の巔平打んと其奇異や兩馬の正中に忽然として大の法師立顯れ小  
 林が薙刀と中に支へて豊人が必死と救ふ形勢兩陣の軍兵們深く  
 怪しと眼と止りて着るに在るも非ど無にも非は容と顯つと忙々恍  
 々たる繚日月光明の如く兩軍共心醉るが如く驚奇感愕せざるを  
 く我と忘れて着入りたり然る強勇の團藏定景も我慢の心身漸  
 弱りと覺力も俱に衰へれば眼眩えて息遣ひせざるく大汗飛泉





團藏

九字名号  
の奇端  
豊人初  
陣切名  
の圖



豊人



の如く面に益を喫く声の牛の吠る如く馬の足並四度路に踏立る  
 に豊人得たりと附入つ着込の端もと丁と斬付颯と飛退とて敵  
 と勞一虚と謀つての衡と附込利腕太股四五箇所計り當る任せ斬  
 付られて強氣の定景も今溜りお奪る薙刀をりと投棄大手と  
 葉掌て駈巡り摑と挫んと追迫れ以前の大法師再立頭れて豊人の  
 姿を打殺ひつ掌に拿珠數以て小林が眉間と破と打居給へ定景兩  
 眼眩より久人頻に睜と閉つ開きつ馬上に悶へ透と考へ豊人茲と  
 馬進寄鐙の端にて確と蹴るもの定景暫時も惚へ馬より  
 撞地落る所と豊人續て馬飛下り折重りつ短刀杜抜押へて首を搔斬  
 くれは兩陣軍兵聲齋しうして感稱せざるに無りたり豊人奇異の

手柄と着すは孫市の歡び云も勿論之若の裡にも斯と看るより少  
 年單身にして強敵を討俺們籠屈して援兵憑むに如何も大人氣あき  
 次第之疾く打て出て追捲れよと下間仲之自ら三百余人と卒一城  
 戸を開きて斬て出れば孫市與四郎も隊伍と立直一陣脚堅りて戦ふ  
 程に間鍋の勢散々崩され僉我先にと逃出ると石山方三將手  
 と成て嚴しく後を追立々多這時紅日西洋に没し殊更雨雲半天に霰  
 ふと齋く早燥に鬱蒸せる雨水雷鳴發して降出しければ戦ひも早  
 是迄として逃る敵兵追棄にして今夜石山後詰の軍勢は木津の若お  
 宿陣して討取首級共數へ看るに九三百余級を得るとあん干時天正  
 四年丙子六月廿日の戦や



人として信と失はざる者い管を定つて信の報あり故に悪報  
亦管を運る然ハ高く飛遠く趨る共罪科遁ん支難くも有る  
鈴木豊人齡青一と雖も前因三寶歸命の人にも深く弥陀此  
誓願と信伏し假にも曲る私を存せざる忠孝の二と兩翼とし  
信心の旨と本體とあせり應報已に住吉ふ擒の難を脱過す  
に強敵小林と討雷し緯人力の速ぶ処に有る之豊人這時開  
山御染筆ある以前の御名號と肌ふ附陣死せば直に極樂往生を  
決定し軍前に臨み働きたるに専心神爽にして撓まざる萬馬の  
中も畏怖る緯少く小林定景との一騎討に不測の勝利を得  
るりたるハ偏に高祖の冥助として倍々信心肝に銘じ彼御名號

把出々床の間に掛て拜し終り寂と瞻め奉りなれば勿体なく  
も九字の尊號頭字より始め処々に及疵とバ負給ひ血に塗れ  
て御在るにぞ豊人の感涙に咽びて頂拜し斯窶しき凡夫の躬  
の奈何なる佛縁と結び置てや身替りに迄立給る緯惡業深重此  
躬の勿体ふやと地に平伏て歎きけるの所理と云ふも愚かりなり  
此夙説石山中一聞へれば上人始め數多の勇將高祖の御奇  
瑞愈信仰し不可思議の威力著明にして門下を恤と給り上  
ハ信長假令天下の兵と牽ひ張良陣平が謀智を施し十重二  
十里に圍繞攻とも何の恐怖も有べきやとて日來の銳氣十倍  
て勇に信ある緯限りなく然ハ這豊人石山に入城し自是數度



の戦ひに高名多く危険の難戦に遭と雖も竜に一度も金瘡と  
受む織田石山和睦と成後の父子共に故卿雜賀に歸り心易く  
田圃と耕耘し宗法と歡び打過りるが天正の季の頃<sup>てんせい</sup>に到りて  
關白秀吉公豊人と名呼せられて懇命有奉仕と勸めて尔名  
を更め鈴木孫市郎と呼せ給ふ今も尚尔子孫の亂ハ東國の  
舊家の家士に遺る云亦高祖聖人身替り名號も俱に尔  
家に持傳へ尊ぶとぞ紀州雜賀卿の中に於も孫市屋敷と云  
傳ふ処あり今ハ田畠と成て尔地定るるを或ハ云鈴木の氏族ハ  
今に到ても雜賀の郷に家續ふまとも云

繪本石山軍記第二編卷之七年



